

深川あやかし屋敷奇譚

～天眼通の旦那と春の夜のまぼろし～

篠目いく子 Ikuko Sasame



アルファポリス文庫

<https://www.alphapolis.co.jp/>

目次

犬神

人喰いつづら

狂い
三味線

201

109

5

狂
い
二
味
線

(一)

屋敷の庭木が綾錦のごとき衣を纏いはじめた、神無月のはじめ。

仲町への使いから戻った女中のお凜は、茶の間の光景を前に縁側に立ち尽くしていた。頬を強張らせ、わなわなとふるえているのは、ひやりとした朝の風せいではない。感激に打ちふるえているからでも、もちろん具合が悪いからでもない。

怒つているのである。それも猛烈に。

「旦那様……またそんながらくたを預かつたんですか？」

声を発するのもやつとのお凜の視線の先には、大人の足ほどの大さと長さがありそくな朽木が転がっていた。巨大な手に捻られたのかと思うほど歪み、黒ずんだ樹皮は無数の蛇が絡みついたかのような鱗に覆われている。美しく整えられた茶の間にそぐわぬ、あまりにも不気味な姿だ。

「がらくただつて？ 失礼な」

正体不明の枝だか幹だかの前に座り込み、樹皮をうつとり撫でていた青年が心外そうに言った。

青年はこの屋敷の主で、名を仙之助といふ。

「聞いて驚けよ？ これはな、世にも珍しい人面樹だ。人面樹」

呻いたお凜の顔が引き攣つた。だが主は黒々とした瞳を輝かせ、そうさ、と声を弾ませる。

「ここを見てみろ。ほら、ここだ！ どうだ、苦悶するような人の顔があるだろう。な？ こいつがだな、睨むんだと。珍しい風情の枝だもんで、床柱にでもしようと洲崎の浜から拾ってきたそなんだが、ある日閻魔みたいな恐ろしい目で睨みつけて、睨いの言葉を唱え出したそな。それで、悪いことがどんどん起きて止まらない。こいつはたまらん、預かってくれ、とさつきのお客が頼み込んできたんだよ」

嬉々として指すあたりにはうねうねと鱗が寄り、波のような複雑な模様が浮かび上がっている。それが顔とやらであるらしい。

お凜は眩暈を覚えながら障子の框を掴み、きりきりと爪を立てた。使いに出る際、庭先で見かけた来客か。どこかの商家の旦那に見えたが、そんなもの

を持ち込んでいたとは。お凜が目を光らせていたならば、こんな小汚い朽木は突っ返しに違いないのに。屋敷を留守にした自分の迂闊うかつが悔やまれてならぬ。

「そんなもの、まがいものに決まっているじやありませんか！ またがらくたを押し付けられて。ただでさえお屋敷ががらくただらけだというのに」

くわつと目を見開き詰め寄るお凜に、仙之助は負けじと小鼻を膨らませる。

「がらくたがらくた言うな！ 皆いわく因縁付きの、呪われて祟られた恐ろしい品なんだぞ？ ほら、この恐怖に歪ゆがんだ、嘆き悲しむような顔ほほときたら……」

「顔なんてありやしません。氣のせいです」

お凜が般若はんにやの形相で唸うなると、怯えた主が謎の人面樹に抱きついた。

「人面樹だなんて、馬鹿馬鹿しい。これをお屋敷に置くだなんてとんでもありません。とりあえずお庭に放り出してください。葺きでも育てるか、叩き割つて薪まきにでもした方がまだ役に立ちます」

「なんという極悪非道を口にするんだ。雨晒あまざなしにして本当に葺きが生えたら可哀想だと思わないのか？ わあ、やめろ！ 私の可愛い人面樹に何をする！」

「松葺まつたけか椎葺しいたけでも生やしてくれたら、私も可愛がつてあげます」

枝を転がして縁側から放り出そうとするお凜に、鬼きと仙之助が悲鳴を上げる。

当年十六のお凜は、すんなりとした手足のわりに大層な力持ちで、物怖じしない、しかし者で通つている。つんとした鼻や血色のいい頬、よく表情を変える瞳にも愛嬌がある。だが、奇矯な主に振り回されて鍛えられたのか、二年あまりの奉公ですつかり貢禄がついてしまつたらしい。今や、仙之助よりもよほど凄すこみと胆力がある……と、同じ屋敷の奉公人であるお江津と富藏に評されているのだった。

一方、人面樹を抱き締める仙之助は当年二十六。なで肩で細身の体つきに、大ぶりな源氏香柄げんじこうがらをちりばめた黒の衿あわせ、芝翫茶の羽織、そして臍脂えんじに更紗文さらさもんを織り込んだ帶と、いう通好みの出で立ちが板についている。浅草田町の高級料理茶屋「柳亭やどり」の次男坊で、名うての遊び人として名を馳せる放蕩息子であるからさもありなん。粋な細髪ほそまげといい、美しく整つた鬢びんや髪たほといい、装いには一分の隙まもない。品のいい顔は白く滑らかで、黒々とした大きな瞳も印象的な、黙つていれば垢抜けた美男子である。……黙つていれば、実はこの仙之助、美女と怪異を愛することにかけては右に出る者はないという、奇妙奇天烈な性癖の持ち主なのだ。

屋敷はいわく因縁付きだとかいう得体の知れぬがらくたであふれ、世間様から「あやかし屋敷のれんわ」などと揶揄ねぎらひされる始末。数年前には、実家柳亭の店主と女将おかみが、この次男坊に暖簾分けしてやろうとか、どこぞの大店の婚入り先を見つけてやろうとか心を碎いた

のだが、当の仙之助は冗談は由之介とばかりに目を剥いて、
「嫌ですよ、そんな氣ぶつせいなのは。こんな極楽とんぼに、商いだの婿たのが務まる
わけないでしよう。どら息子に夢を見すぎですよ、おとつあんたちときたら。いやい
や、おとつあんやおつかさんや兄さんに恥をかかせたくないから言うんです。店の名
前に傷がついたらどうします?」
と親孝行なんだか親不孝なんだかわからぬ台詞で諭したそうだ。

その上、
「それよりも、どこかに適當な屋敷の一つでももらえませんか。そうしたら大人しくの
らりくらり暮らしますんで。その方がずっと安上がりだと思いますよ。ね?」
と臆面もなくねだつて、この深川木場は島田町に屋敷まで用意してもらつたという経
緯がある。まさに天をも恐れぬ与太郎っぷり。柳亭のご家人の苦勞が偲ばれるというも
のだ。

おまけに、誰が言いはじめたのか怪異を見分ける千里眼だと噂されて、今では「天眼
通の旦那」の二つ名で巷間に知られている。そして、その噂を聞きつけて相談事
を持ち込むお客様が後を絶たぬのである。
彼らの相談事は様々だ。……けれど、ただ一つだけ似通つたことがある。

天眼通の旦那を頼つて訪れるお客様たちは、色々なものを屋敷に持ち込むのだ。
それはこの人面樹のようなものとは限らず、時には人であつたり猫であつたりする。
相通じるのは、皆揃いも揃つて、いわく因縁付きのあやしげなものである、ということだ。
「旦那様、黒江町からお客様がお見えです。急ぎのご用事とか……一体、なんの騒ぎで
すか?」

お江津が縁側に現れ、正体不明の枝に組み付いて争う主従にぎよつとする。
「誰だつて? 今、見てのとおり取り込み中だ」

脣に転がり、熊か猿のごとく木にしがみついた仙之助が声を荒らげた。

お江津は下がり気味の目尻をますます下げて嘆息すると、主の顔を覗き込む。

「二代目杵屋勘十郎様のお妹様です。天眼通の旦那様にどうしてもお目にかかりたいと
なんでも、勘十郎様のお命にかかるお詫で、ぜひお目にかけたい品がおありだそうで
物騒な言葉に、お凜も仙之助も動きを止めた。

「……へえ。つまりそいつは、いわく因縁付きの品つてわけかい?」

首をもたげた仙之助は、童を思わせる無邪気な瞳を光らせ、つうつと口角を引き上げ
て笑つた。
仙之助に応じるかのように、一陣の冷たい風が艶やかに色づく庭木をざわめかせて通

り過ぎる。潮騒のような葉擦れの音が、どういうわけか、木々の囁きとも笑い声とも思われてならなかつた。

「私、二代目杵屋勘十郎の妹でお春と申します。突然押しかけ、申し訳ございません」
居間で向き合つた娘が、畳に両手をついて言つた。
数寄を凝らした欄間や銘木の柱も美しい座敷は、長火鉢に炭が熾され、ぬくぬくとあたたかい。しかし、硬い表情で座したお春は、凍風に晒されているかのごとく青ざめていた。

二十になるかどうかという年の頃と見えた。よほど急いでやつてきたのか、白い額に汗が浮かんでいる。それでも、眼差しや所作にぱつと目を引く美しさがあつた。淡青い色の地に映える朱い椿を散らした袴、襟元には赤をきかせ、大胆な色合いの太縞の帯という洒落た出で立ちだ。艶やかな島田翫に差してある櫛や簪も趣味がよく、それでいてどこかきりりとした空気を纏ついている。

そのお春の膝の前には、江戸紫の風呂敷を被せられた、細長いものが置かれていた。

「二代目杵屋勘十郎さん、存じてますよ」

娘の向かいに座した仙之助が嬉々として言う。
「いい糸を弾くお方ですよねえ。お父上の初代勘十郎さんも、杵屋宗家から別家を許された名手でいらっしゃいましたね」
茶と茶菓を出して壁際に控えたお凜は、内心で横手を打つた。芝居好きの主から聞いたことがあるようだ。歌舞伎の長唄三味線方などを務めている有名な弾き手だったはずだ。

杵屋宗家といえば、泣く子も黙る長唄三味線方の名跡だ。その宗家から別家を許されるほどであるから、初代勘十郎というお人はよほどの才の持ち主であつたに違いない。なるほど、お春がどこか凜とした雰囲気を漂わせているのは、家族や自身が厳しい芸事の世界に身を置いているからなのだろう。

「過分なお言葉恐れ入ります。本日はこちらを、どうしても天眼通の旦那さんにご覧いただきたくて参りました」

娘は膝の前に置いたそれに両手を伸べ、ほつそりとした指で風呂敷をそろそろと剥がしていく。下にあつたものが露になり、お凜は目を瞑つた。

細長い木の棒に白い糸巻。それから、木の棒の上を走る黄色い弦と、四角い胴が見える。——三味線だわ。

お凜は不思議な気分で三味線と娘を眺めた。綺麗な楽器だけれど、これがなんだといふのだろうか。

お春は落ち着かぬ様子で時折障子の外を気にしている。まるで、誰かに追われているかのようだ。

「この三味線は『朝霧』^{あさぎり}と申します。兄の勘十郎に取り憑いて、命を奪おうとしている恐ろしい楽器です。兄の部屋からどうにか盗んで参りました。どうか、どうかお助けくださいまし」

お春の怯えに満ちた声に、お凜は耳をそばだてた。人に取り憑く三味線、そんなものがあるのだろうか。

「これは、この朝霧に相応しい腕前^{ふざわ}の弾き手にしか鳴らせない三味線なのだそうです。そうでない者が弾けば、やがて正気を失い命を奪われるのだと。兄はろくに食事もせず、弟子の稽古^{けいこ}も人に任せ、朝から晩までひたすらこれを弾いておりました。そして、命を吸い取られるかのように、みるみる瘦せ細つていきました……」

お凜は朝霧という三味線をしげしげ眺めた。黒に近い紫檀^{しづらん}の棹と、象牙^{ささげ}の糸巻に駒、白い皮を張った胴。

贅を尽くした装飾こそないが、簡素の美を凝縮したかのようだ。凜とした佇まいの楽器である。——だが、それだけだ。

お凜に三味線の心得なぞないし、祖父が手慰み^{てなぐさ}に爪弾くのを見たことがある程度だから、はきとはわからない。けれど、そんなおどろおどろしい、ましてや人を呪い殺す三味線にはとても見えなかつた。

が、三味線に疑わしげな視線を向けるお凜とは反対に、仙之助は欣喜雀躍^{きんきよくやく}して声を弾ませる。

「朝霧。美しい名と姿ですねえ。私、これでも色んないわく因縁付きの品を蒐集^{しゆうう}しておりますが、三味線は初めてです。人に取り憑く恐ろしい楽器とは、ぞくぞくするじやありませんか。まるでお春さんの美貌のようだ魅惑的だ……」

とさくさに紛れてお春を口説きはじめるので油断がならぬ。呪いの三味線を前にして、こみ上げる笑いを堪えきれない様子の仙之助を、はあ、とお春が怪訝^{けいげん}そうに見ている。

「早速ですが、ちょっと弾いてみてもいいですか。私これでも三味線には自信があつてですね……」

仙之助が、つるりとした黒い瞳を輝かせ腰を浮かせる。

「いけません！」

「旦那様、やめてください！」

お春とお凜が悲鳴を上げた。

「なんだい、弾いてみなきや何が起ころるかわからないじやないか」

仙之助は不満げに言つて再び手を伸ばそうとする。しかし主の動きを見切つていたお凜が、一瞬早く三味線を奥へ押しやる。仙之助の手はすかつと宙を掴んだ。

「ぬぬつ」

歯噛みする仙之助とお凜が睨み合う。

「何があつたら旦那様はよくても周りの者が困ります。妙な真似はなさらないでください」

見境なしに怪異話に飛びついて、いわく因縁付きのがらくたを集めては、お凜を振り回して怪異の謎解きに付き合わせる主である。まあ、幾度か怪しい品々の謎を解き明かしてみせたこともあるにはあるのだが、火事に巻き込まれそうになつたり、侍に斬られそうになつたり、はたまた他人の長屋を解体して土間を掘り返し人骨を見つけたり、ところくなことにならぬ。つい先ほどだつて、あんな朽木をほいほい預かることになった。祟りだかなんだか知らないが、おかしな三味線に入れ込んで、今以上の奇行に走られたらかなわないのでだ。

そもそも、呪いの三味線などお凜は信じていないけれど。

「せつかくの呪われた三味線なんだ。試さない手はないだろう。祟るんだぞ。取り憑くんだぞ。すごいだろ？ 生きててよかつた！ つて気分になるだろう」

そんな生き生きと瞳を輝かせながら言われても、と頭痛を覚えるお凜である。

突飛な主を持つた苦労をしみじみ噛み締めつつ、再び伸びてきた仙之助の手から三味線を遠ざける。目にも留まらぬ早業。うぬ、と伸びる仙之助の手。しかしお凜の見切りは完璧だ。電光石火、迅雷一閃、かるた名人も裸足で逃げ出す技の冴え。伊達にこの奇矯きわまる主に鍛えられていない。またもや畳を引っ搔いた仙之助が口惜しげに喚く。

「お凜！ お前、私をからかつてないか!?」

「まさかそんな。滅相もございません」

目を半眼にして応じるお凜に、嘘をつけ、と主が叫んだ。

「じゃ、そろそろお気は済みましたか、旦那様。お客様のお話がいつまで経つても進みませんので、諦めてお静かにしていただけたら……」

「お前な、いつも思うけど主人の扱いがぞんざいだぞ？ 念のために言つておくが私は子供のように悪態をつきながらも、仙之助はしぶしぶ手を引っ込める。それから、おほん、と咳払いし、お春に向き直つた。

「で……どうして朝霧が勘十郎さんに取り憑いてしまったのでしょうか、お春さん」

「は、はい」

主従の仁義なきやり取りを呆気に取られて眺めていたお春が、すっと表情を引き締める。

「それには、勘十郎兄さんがこの三味線を手に入れた経緯をお話しあなません。私には二人の兄がおります。初代の父が三年前に亡くなり、一番上の兄が二十四で二代目を継ぎました。そして……ある日妙な三味線を持ち帰ったのです」

「妙な三味線」

鸚鵡返しに言つた仙之助の視線が、二人の間に横たえられた三味線に向く。

「二月ほど前の葉月のことでした」

頷いたお春が、ふるえを抑えられぬ声で語り出した。

長兄・勘十郎は中村座で『妹背山婦女庭訓』の興行を終えた後、皆と門前仲町にある料理茶屋で痛飲して黒江町の家に戻つてきただと。その時、勘十郎は一挺の見慣れない三味線を手にしていた。

「そのまま、見たこともないような昂ぶつた面持ちで部屋に籠もつて出て参りません。どうやら持ち帰った三味線を弾いているらしいのですが、歪んだ奇妙な音ばかりが聞こ

えてきます。数日部屋から一歩も出てこないので、皆で心配して声をかけたものの、邪魔をするなと言うばかりで……」

一体どうしてしまつたのか、とお春が必死に唐紙（紋や柄のある紙を貼つた襖）越しに訴えると、兄はようやく姿を見せた。

「兄は、自分は天下の名器を手に入れたのだ、と申しました。鬼気迫るような、ぎらぎらとした瞳で……」

怯えが滲む娘の声に引き込まれ、お凜は固唾（かたず）を呞む。

「ごく……当たり前の三味線に見えました。私は三味線など遊び程度にしか嗜んでおりませんが、そのくらいのことはわかります。それほど古いものでも新しいものでもなく。よい木と糸、それに駒なのが見て取れました。皮の良し悪しだけは見た目からはわかりませんけれど……でも、それだけでした」

眼前の三味線に恐ろしげな目を向けるお春の細い喉が、こくりと動く。

「しかし、兄はこの世のものとは思えない音色を耳にしたのだそうです」

風のない臘月夜だった。昼間の炎熱が地面の近くに重く淀んでいて、手足に纏わりつくように思われた。

提灯ちょうとうを手にした勘十郎は、油堀川あぶらぼりがわ沿いの武家屋敷ぶけやしきが並ぶ暗い道を千鳥足ちどりあしで歩いていた。夜通し賑わう仲町なかまちとは異なり、このあたりは灯りもまばらで闇が濃い。湿った感触の闇の奥から、じりじりと呟く蝉せみの虚ろな声だけが聞こえてくる。時折雲が切れて臘おはなな月明かりが漏れる他には、提灯の灯りだけが頼りだった。

不意に、薄紅い花弁はなばなが、ひらひらと舞はなぶに舞いながら目の前を通り過ぎた。

——桜か。

勘十郎は思わず足を止め、のっぺりとした闇に向かって提灯を掲げた。それから、まさか、と笑う。桜などとうに散った。蛾がか何かを見間違えたのだろう。

少々酒さけが過ぎたかな、と思いつつ歩き出した時。

音曲おんくが聞こえた。

九重ここのえに、咲さくけども花の八重桜、幾代いくえの春を重ねらん、
しかるに花の名高きは、まづ初花はつはなを急ぐなる、近衛殿ちいわどのの糸桜いとざくら……

不意の三味線の音色と、冴え冴えとして乾いた唄声に、一瞬で酔さいが醒めた。
足を掴つかめたように棒立ちになる。心臓の音が耳の奥でどんどん大きくなつていく。

三味線弾きの研ぎ澄とがひらされた感覚が、この音色の尋常ならざることをびりびりと伝えてくる。

——なんだ。この糸の音は、なんなのだ。

見渡せば柳桜やなぎざくらをこきませて、都は春の錦燐爛にしきらんらんたり、
千本ちもとの桜さくらを植え置き、その色を所の名に見する、千本せんほんの花盛り、
雲路うんろや雪に残るらん……

『西行桜』だ、と即座に気づく。

猿樂（能）の同名の作品から謡曲の一部を取つた地歌じうたで、京の東山ひがしやまと嵐山あらしやまの桜を歌つてゐる。猿樂の筋書きは、桜の精である老人が西行の夢に現れ、「夢の中の翁おきな」を名乗り、舞いを披露するというものだ。

勘十郎の目の前に、薄紅色に霞む嵐山が優美な身を横たえ、白髪に美麗な着物を纏つた桜の精が幽遠な舞いを踊つてゐる。淡く香る花吹雪はなふぶきが雨のごとくに降りしきり、魂をも溶かすような音曲が近く遠く鳴り響く。どれほどかの間、そうして桜の幻影に心を奪われていただろか。ふと我に返ると春の

嵐山も翁もかき消えている。雲が切れ、青白い月明かりがあたりを照らす。闇に目を凝らせば、ぬらぬらと黒い水を湛える堀の畔の大きな柳の陰に、三味線を手にして座り込む男の姿があつた。

その時になつてようやく、脳天を打ち割られるかのごとき衝撃が勘十郎を襲つた。全身の毛穴が開き、冷や汗が流れる。視界が傾き、足が宙を踏むようにおぼつかぬ。

三味線を抱えたその男に、勘十郎はよろめきながら歩み寄つていつた。

「……あ、あんた。今の三味線は……あんたが……」

掠れた声で必死に尋ねた。

——なんという音色だ。

歓喜と絶望が入り混じった感情に、気が遠くなりそうだつた。

——あの音色に比べたら、俺の音曲なんざ雑音だ。まるで児戯のようなものじやないか。羞恥のあまり、今すぐ掘割に身を投げてしまいたい衝動が胸を突き上げる。

三味線にあんな音が出せるとは。あんな音がこの世に存在するとは……

「あんたさんも、これに取り憑かれましたかい」

男がぼそりと言つて、ゆつくりと振り返る。

提灯と月明かりにぼうっと浮かび上がつた男の容貌に、勘十郎は危うく声を上げそ

うになつた。土氣色の肌と痩けた頬。唇は乾いてひび割れ、濁つた白目が薄黄色い焰の

ようによく見える。

男の顔に浮かんでいるのは、まさに死相だつた。

「俺は、ここいらじやあちつとは知られた鈴吉つていう三味線弾きでしてね。こいつは朝霧つていう名器なんでさあ。これに相応しい名手だけが鳴らせるつていう、この世にまたとねえ逸品だ」

「あ、朝霧？」

「そうよ」

男はぜえぜえと喉に絡んだような息をして、目を爛々と光らせる。

「これは名工石村近江の作といわれていてね。もとは盲目の旅芸人の愛器だったのさ。去年の春の夜、俺はまさにこの場所で、その旅芸人が朝霧を奏でているのを聞いたんだ。剃髪に、櫛櫻を纏つた瘦せつぱちの男でさ。あちこち流れて深川に辿り着いたんだと言つてたよ。だがその音色ときたら……この世のものとも思えねえ、天上の楽の音のようなものだつた」

恍惚とした表情の鈴吉が発した、天上の楽の音、という美しい言葉がひどく禍々しく響いた。

「なんという名だ。その旅芸人の名は」

さぞ名のある弾き手なのか、と身を乗り出す勘十郎に、さあ、と男は首を横に振る。

「『桜の精』とでも呼べと笑つてたな。妙な男だつた。だが、そんなことよりも朝霧だよ……俺はもう、あれに魅入られちまつてね」

音色に取り憑かれた鈴吉は、幾日も旅芸人のもとに通いつめ、朝霧を譲つて欲しいと懇願した。けれど、どうしても聞き届けてもらえなかつたという。

「朝霧に相応しい弾き手でなきや鳴らせない、諦めろつて言うんだよ。無理に弾こうとすれば祟られて命を落とす。ある時には、鳴らせないことに絶望して掘割に身投げした者もいるつてな。そりやねえよ。あんな糸の音を聞かされたらよ、三味線弾きなら取り憑かれるに決まつてるじゃないか。なあ？ あんたさんには、わかるよな。俺とあんたは似てるもんな」

馴れ馴れしく笑う鈴吉の掠れた声が、勘十郎の耳を不快に撫でる。似ているものかと反発を覚えるのに、朝霧の音色を思い返すだに、これを手に入れられるのなら何もかもを擲つていい、という衝動が込み上げるのを否定できない。

「俺はどうしてもこいつが欲しかつた。だから、もらつたんだ」

三味線を抱き締めて無邪気に笑う男に、勘十郎は訝しがる。

「もらつたつて、どうやつて……？」

鈴吉は、仄暗い光を湛えた目を弓なりにして、囁いた。

「水に、突き落としたのさ」

勘十郎の背筋にぞうつと寒気が走つた。

「旅芸人ごときがこれに相応しくて、俺が相応しくないはずがない。そうだろう？ 河原者なんぞに音曲の良し悪しがわかつてたまるか！ だから、それ、そこの水にさ……」

旅芸人の枯れ木みたいな両手から朝霧を奪い取り、目の前の掘割に突き落としたといふ。

あつ、と両手を宙に泳がせた旅芸人は、朧月を映す黒い水に落ちていつた。

生きしい悲鳴と水音が聞こえた気がして、勘十郎は両の手で自分の二の腕を掴み身を竦める。

干からびた鈴吉の顔に、ひびのような皺が広がつていく。かかかか、という乾いて虛ろな笑い声が、骨の浮き出た喉の奥から沸き上がり、ぱくりと開いた唇からあふれ出す。

「その旅芸人は、もがきながら叫んでいたよ」

大きく目を見開き、鈴吉は咲笑と共に言った。

——浅ましや、鈴吉。わしの魂、命にも等しい三味線をよくも奪つたな。お前にそれ

が鳴らせるものか。たとえこの命が尽きようとも、三界睨つてくれようぞ……！

旅芸人は、そう叫びながら暗い水に消えたという。

耳障りな笑い声がふつりと途切れ、鈴吉は疲れたように背を丸めた。

その体が、急に一回り小さくなつたように見えた。

「ここまで鳴らすのに一年以上もかかつた。だがね、こんなもんじやないんだよ。この三味線は、本当は、もつと……だが、ああ、残念だねえ。もう時がない。俺の手は、ぼろぼろだしよ……ここまで、か……」

ぼそぼそと語る鈴吉の顔が髑髏のように見えてきて、勘十郎は思わず後ずさる。鈴吉はいかにも口惜しそうに嘆息し、がくりと項垂れた。

そしてそれきり、動かなくなつた。

ちやぶ、ちやぶ、と河岸を洗う水の音だけがかすかに耳に届く。

「——鈴吉さんよ」

勘十郎は、からからに干上がつた喉から声を絞り出した。

蒸し暑い夜だというのに、冷たい微風がふつとうなじを撫でる。まるで誰かの冷たい手が触れたかのような感覚に、全身の毛が逆立つた。ふるえる勘十郎の手から提灯が落ち、音もなく燃え上がる。冷や汗に濡れた両手が勝

手に動く。はあ、はあ、とふいごのごとく呼吸しながら、己の両手が三味線の棹を掴むのを凝然と見つめる。

刹那、渾身の力で鈴吉の手からそれを奪い取つていた。支えを失つた男の体が、ぐしゃり、と土に頽れる。三味線に精氣を吸い取られたかのよう、その体は骨と皮ばかりに見えた。

かちかちと歯を鳴らし、死んだ男を見下ろしていた勘十郎は、くるりと踵を返すなり駆け出した。

——浅ましや。

しゃがれた、骨の髄まで凍えさせる声が、耳元で囁く。

勘十郎は歯を食い縛り、声から逃れようと闇の中を無我夢中で走り続けた。

そこまで語つたお春が、今にも泣き出しそうに顔を歪めた。

「そんな恐ろしいものをどうして盗んだのかと兄を詰りました。ですが、あの音色を奏でるためなら魂でも売ると、兄は朝霧にのめり込んでしまいました。次第に稽古や演奏に身が入らなくなり、手や肩の具合がおかしいと漏らすのを耳にするようになります。どんどん瘦せていくので問い合わせたら、夜眠ると悪夢に悩まされると申します」

「悪夢、でござりますか」

「お凜が恐々尋ねると、はい、とお春が形のいい顎を引く。

「檻樓を纏つた盲目の旅芸人が、三味線を返してくれ、あれと引き離されたら自分は生きていられない、手遅れになる前に返してくれ、と水の中から両手を伸ばし、兄の袖を引くのだそうです……」

黒い水から突き出た枯れ枝のような両手を見た気がして、お凜は背筋がうそ寒くなる。「兄のことが案じられてならなくて、こつそりご祈祷やお祓いをお願いしたりしましたけれど、ちつとも効いた様子がなくて。下の兄にも相談しましたが、まともに取り合ってくれませんでした。それで今朝、隙を見て朝霧を盗み出し、そのまま旦那さんのお屋敷に駆け込んだのです。天眼通の旦那さんのお噂は、以前耳にしたことがございましたので」

途中、掘割にでも捨ててしまおうという考えが頭をかすめたが、三味線弾きの家に生まれて三味線を粗略に扱うなんて罰当たりなことはできなかつた、とお春が締め括つた。お凜は思わず深く息を吐いた。なんという悍ましい話だろうか。清楚な佇まいの三味線がひどく禍々しく見えてくる。だが、仙之助は少々童顔の顔を綻ばせ、ふうん、と双眸を樂しそうに光らせている。つくづくわからぬ主だ。

「そういえば、下の兄上というと……」

仙之助が、つと小首を傾げた。

「確か、糸之丞さんとおつしやる方ですよね？ 勘十郎さんよりも腕がいいと言われていた……稀代の名手になるに違いないって評判だつた覚えがあるんですけど」

「——ええ、おつしやるとおりです」

お春の表情が翳る。

「糸之丞さんは、そりやあ才がありました。子供の私が聞いても惚れ惚れとするような、神がかった腕前でしたもの。勘十郎兄さんではなく糸之丞さんを跡継ぎに、という声もあつたほどで。けれど騎らない、とてもやさしい面目な人で」

兄妹三人仲がよかつたんです、と痛みを堪えるように言う。

『よかつた』とおつしやると、今は違うんですか

すばりと尋ねる仙之助に、娘の肩が悄然と下がつた。

「はい。糸之丞さんは、三味線を捨ててしましました。父が亡くなる少し前から悪所を遊び歩くようになり、稽古にも身が入らなくなつて……兄が二代目勘十郎を継ぐ頃には家を飛び出してしまつたんです」

「そいつはまた、どうして。もつたない話だ」

演奏を聞いてみたいのになあ、と仙之助は実に口惜しげだ。

「才があるのに跡を継げないことが、納得いかなかつたんだと思ひます。ここ数年は、家人の誰にも心を閉ざして いました。勘十郎兄さんは糸之丞兄さんの行状が我慢ならないようで、顔を合わせては喧嘩ばかり。殴り合いの騒ぎになることもございました。家を出た糸之丞兄さんは、蛤町の長屋に暮らして います」

お春がうつすらと涙を溜めた目を瞬かせる。

「母はとうに亡くなつております。父も失い、この上きようだいがばらばらになつてしまふなんて、耐えられません。勘十郎兄さんにどうしても正気を取り戻して欲しいのです。且那さんより他にお縋りすができる方がおりません。お願ひ申し上げます。どうか、この呪わしい三味線を預かつていただけませんか。このとおりです」

そう言つて畳に両手をつくと、必死の面持ちで頭を下げる。

「そういうことならお安い御用です。この仙之助にお任せいただけたら、悪いことなぞ起きやしません。それでも、なんとお兄さん思いの、愛情深くおやさしいお方なのでしょう。私、感動で胸の詰まる思いがします」

仙之助はほんのり頬なぞ染めて、切なげに胸を押さえてみせる。

「きっと、人知れず思い悩んでおられることがまだまだありますね。私も見ての

とおりの纖細な男ですからね、よくわかりますとも。どうか私めに心の内を打ち明けてはくださいませんか、お春さん。ああ、あなたのその涙を拭つて差し上げたい。なんなら私も一緒に泣いて差し上げたい……！ というわけでどうでしよう、紅葉狩りなんてご一緒に」

悪い虫が騒ぎ出したようだ。怪異と同じく美女にも目のない主である。仙之助は熱っぽい視線と口調で身を乗り出そうとする。

「ですが」

とお凜はすかさず遮つた。

「勘十郎さんはお嬢さんにお怒りじやありませんか？ 三味線を返せとおつしやるのでは……」

「兄には、朝霧は掘割ほりわりに捨てたと申します。それで兄が元に戻るのなら、恨まれても構いません」

「楚々とした顔に瞳を強く輝かせ、お春が言う。

「ですから、どうか、どうかお願い申し上げます」

娘が両手をついて再び深く頭を下げる。障子の外に雁が音が遠く響いた。

「弾き手を狂わせる三味線か。いいねえ、旅芸人の恨みの声が聞こえてくるようじゃないか」

お春が去った居間で、仙之助が手にした朝霧に頬ずりせんばかりの様子で言う。

「そんな三味線、聞いたことがありません。ただの粗悪な三味線なのかもしませんよ」

祟りも呪いも信じないお凜の冷めた言葉に、仙之助はきっと秀眉を吊り上げる。

「何を言うか。二代目勘十郎が取り憑かれるほどの品なんだぞ。正真正銘呪いの三味線に決まってる。——だがお凜、今回はすんなり三味線を預かつたじやないか。毎度がら

くたを増やすなって言うくせに」

「それはその、人面樹はともかく、三味線程度のことであればさして面倒はありませんし。それに……」

お凜は淹れ直した茶を出しつつ、お春の切羽詰まつた顔を思い浮かべた。

「私にも兄や姉、弟がおりますから。きょうだいでがみ合うなんてどんなに悲しいことか。お春お嬢さんのお気持ちはお察しして余りあります」

お凜の実家である深川大和町の蕎麦屋『かやの』は喰しい小さな店だけれど、きょうだい四人仲がいい。敵意を向け合って暮らすだなんて、想像するだに胸が張り裂けそう

だ。なんとかお春の力になりたいものだと思うのである。

仙之助が珍しく神妙な顔で嘆息する。

「わかるなあ、その気持ち。私もさ、あんな口うるさい兄さんだけど結構尊敬してるし、兄さんがいるお陰で私は好き勝手していられるんだから感謝しているんだよ。たまには兄さんの肩でも揉みに行こうかねえ。でも顔を合わせると、芝居通いと芸者遊びはいい加減にしろだとか、がらくたを集めてのらりくらりと遊び暮らすんじゃないとか、着物や小間物に金子をつぎ込むなどが、お説教がはじまるんだよね。肩揉みはやめとこうかな。やっぱり顔を見るのは盆暮れ正月だけでいいや。……いや私は兄さんをとつても愛しているんだよ？」

仙之助の兄・利一は柳亭の跡継ぎで、それはそれは男ぶりがよく、万事に秀でた若旦那だ。次男坊については諦めの境地の父や母とは異なり、不肖の弟を更生させようと涙ぐましい努力をしている。だが肝心の弟はこのとおりときているのだから、まつたくお勞しいこと、とお凜の胸は痛むのである。

「それにしても旦那様。勘十郎さんはこれで正気に戻られるんでしょうか」

「……さあな。芸の道は業の道。果てしないもんさ。天下の名器に惑わされてそう簡単に諦めがつくものかねえ」

遠い目で言つてから、仙之助は三味線を**陶然**と見つめる。

「かくいう私も、こいつの音色を聞いてみたいもんだけどね。骨の髓まで虜にされてみたいじゃないか。だが怖い女中が私に弾くなと言うし」

そう言つて、ちらりとお凜に意味ありげな視線を送つてくる。

そらおいでなすつた、とお凜は嘆息した。

「私に弾いてみろとおっしゃるんですね」

「大丈夫だつて。祟りも呪いもお前を避けて通るんだからさ。何も起こりやしないよ」
 満面の笑みを浮かべ、仙之助は朝霧をお凜の前に押しやつた。
 どういうわけか、仙之助はお凜が祟りや呪いを寄せ付けない体質だと信じ込んでいる
 のだ。お陰で女中としては恵まれた待遇で屋敷に雇われたはいいが、主の妙ちきりんな
 趣味事に付き合わされる羽目になる。しまいには、こうして呪いの三味線を弾いてみろ
 と言いつけられるわけだ。いくらなんでも、二人も命を落としたいわく付きの三味線を
 弾くだなんてぞつとしない。怪異なぞ信じていのいお凜ではあるが、やはりいい気分は
 しないものだ。

「私、三味線なんて習つたことがありません。下手ですよ？　どう考へても相応しい弾
 き手じやございません」

顔をしかめて渋るものの、主は黒目がちな両目を輝かせて力説する。

「そんなこた構いやしない。少しでいいから、どんな音色なのか聞いてみたいんだよ。
 もしかしたらお前には隠れた音曲の才があつて、この世のものとも思えない美しい音色
 を奏てるかもしれないぜ」

いい加減な励ましもあつたものだ。調弦はおろか勘所も何もわからないというのに。
 それに、万が一よからぬことが起きて呪われたらどうするのだ。

なおも渋つてお凜に、仙之助が片膝を立てて力強く言つた。

「わかつた。来月の中村座の顔見世にはお前も連れていくつてやるからさ。どうだ！」
 「顔見世……團十郎……？」

お凜はかつと目を見開く。

「そうとも。團十郎、團十郎。『晝』見たいだろ？」

俄然やる気を出して、主の手から撥を奪い取つた。
 来月は歌舞伎の顔見世興行があり、三座でそれぞれ次の一年間の演目や役者のお披露
 目をする。これは「芝居正月」などと称され、さながら正月のごとき盛り上がりを見せ
 です？」

お凜はかつと目を見開く。
 「かせん 俄然」
 「見たいに決まつてるじやありませんか。撥はどこですか。何をもたもたなさつてるん
 です？」

るのだ。

同じ島田町内に、歌舞伎役者・七代市川團十郎の邸宅があつて、ご近所同士というこ
とから團十郎と仙之助には行き来がある。大人気の顔見世の席も、團十郎の厚意で仙之
助はいい席を確保できるのだった。江戸で絶大な人気を誇る團十郎は、芝居狂いの仙之
助はもちろんのこと、お凜だつて熱烈に観戻している。その團十郎が登場する顔見世に
連れていつてもらえるなんて、そうそうあることではない。祟りや呪いの一ツや二ツ、
いや百でも二百でも、雍ぎ払つて捻り潰してくれよう。一騎打ちに挑む巴御前のごとく、
お凜は雍刀ならぬ三味線をはつしと掴んだ。

「行きますよ」

きりりと表情を引き締め、左手で棹を支え、右手で撥を構える。そして、えい、とい
う裂帛の気合と共に、撥を一の糸に打ち付けた。

どよおん。

耳が歪んだかと思うような、奇つ怪な音が轟いた。

「あれ？」

「ん？」

お凜と仙之助は同時に声を上げた。なんだ今のは。三味線とはこんな風に鳴るもの

だつたか。いや、何かの間違いではあるまいか。

「ええと、こうでしようか。テテテテン……なんて」

氣を取り直して糸をかき鳴らす。途端、濁流のごとき悪音が迸り出て、ぎやあ、と
仙之助が悲鳴を上げた。

「やめろ！　こりやあひどい。なんつうひどい音だ！」

失敬な、とお凜は焦りつつ主を睨んだ。いくら心得がないとはいえ、ここまでひどく
言われるなんて心外だ。断然手に熱が籠もる。

「これは小手調べってもんです。まだ本氣を出していませんから！　ええと、チントン
シャンのチントンシャン……」

「耳がもげる！　呪いか？　こういう呪いなのか？」

「待つてください、思い出してくださいました。うちの爺ちゃんが弾いてました。それ、チリ
チリレンのジャンジャンジャン。なんだか乗つてきました、私。團十郎のためなら、そ
したように空へと逃げ出す気配がする。　隠れていた才が目覚めたのであろうか、と鼻息荒くかき鳴らすお凜の前で、助けて
と仙之助が虫の息で長火鉢に縋りつく。障子の外では、庭木に群っていた鳥が恐慌を来
ました

「旦那様、なんですかこの恐ろしい音！」

「天変地異の前触れいやございませんか。それとも雷様が怒り狂つていなさるのかも」

女中のお江津と下男の富蔵が、周章狼狽して居間に飛び込んできた。

「皆してあんまりじやありませんか」

お凜はすっかり興を削がれて撓を止めた。

「こいつは確かに恐ろしい三味線だ……掘割に身投げしたくなる気持ちもわかるぜ……」

仙之助が地獄を見てきたかのような形相で呻く。

「名手の勘十郎さんでも鳴らせなかつたんでしょう。やつぱり、ただの質の悪い三味線なんじやありませんか？」

「ただの、だと？ この世の終わりみたいな禍々しい音を聞いただらう！ お前の腕がひどいのを差し引いても、こいつはただの三味線じやない。どう考へても呪われてゐに決まつてゐる」

「ぜえぜえ喘ぎながら言い放つと、仙之助は襟の乱れを正し、座り直した。

「なんにせよ、いいものを手に入れたよ、私は。呪いの三味線だなんて最高だ。朝霧や、私のもとに来たからにはもう安心だよ。私はお前をうんと大事にするからね——だがお凜、くれぐれも二度と弾いてくれるなよ。お前が全力で弾いたら深川どころかお江戸が

滅びそうだ」

呪われた三味線を抱き締めながら、お凜に恐怖の色を浮かべた目を向けて言うのだから失礼な話である。

また旦那様の醉狂がはじまつたか、と奉公人が頭を振り振り去つていく。鳥たちが恐々戻つてきて、再び庭で轟り出すのが聞こえる。

「それにしてもだ。こいつを見事にかき鳴らす人がいるんだとしたら……そいつはちょうど、お目にかかるみたいもんだねえ。そとは思わないか、お凜」

脇息にもたれた仙之助は、手元の三味線に夢見るような眼差しを注ぐ。朝霧は、つい今しがた恐るべき騒音を放つたことなどなかつた風に、優美な体を畳に横たえ沈黙していた。

(二)

「ああ、えらい目にあつた。まったく散々だつた！」

村時雨の中、そう嘆きつつ仙之助が屋敷に戻つたのは、お春の来訪から数日後の夕暮

れ時のことだった。

「どうなさったんですか、旦那様。染吉さんと梅奴さんとどうとう振られたんですか？」
お凜が湿った黒羽二重の羽織を受け取りつつ氣の毒そうに尋ねると、
「どうとうとはなんだ、どうとうとは！」さらっと縁起でもないことを言うな」

と、茶の間の座布団に腰を下ろした主が青くなる。
今日は蠶貝の辰巳芸者である染吉と梅奴を連れて、河原崎座で歌舞伎の千穂樂を楽しんできたはずだった。常ならば上機嫌の鼻歌まじりで帰宅するのに、今日はどうしたことだろうか。

「二代目勘十郎だよ。あの人が代役で弾いてるところがあつたんだ」

「勘十郎……ああ、お春お嬢さんの兄上様ですか。三味線に呪われたっていう」

お春の悲しげな顔を思い出し、お凜ははつとした。

杵屋勘十郎は中村座の座付きだが、様々な理由から座の間で人を融通^{ゆうぞう}することは珍しくない。そういうわけで勘十郎が三味線方に入っていたらしいのだが……

「どうも耳障りな三味線がいるのに気づいてさ。調べたら二代目勘十郎だつていうじゃないか。手が呪われたとでもいうのかねえ、身は入つていなし、暴れ馬みたいな調子でひどいもんだつたよ。素人はともかく、耳の肥えた客には聞けたもんじやない。染も

梅も耳がいいからかんかんになつちまつて……」

売れっ子の辰巳芸者だけあって、二人とも三味線の腕前は音に聞こえたものだ。殊に染吉は腕もいいが気位も高い。その上、生前の初代勘十郎の知己^{こじ}であつたそうで、「なんだい、あれが二代目勘十郎だつて？」へそが茶を沸かすよ。あんな伸びた蕎麦みたいな悪音を恥ずかしげもなく客に振る舞うつてのは、一体どういう了見なんだ。お父上の演奏はそりやあ鮮やかで色氣のある見事なもんだつた。勘十郎の看板を張る腕がなんだつたらとつと弟に譲つちまないな。お父上が草薙の陰で泣いていなさるよ。芸に命を懸けてる人間としちゃ我慢ならないね」

などと楽屋に詰めかけて談判しようとする始末。激怒した門弟たちと一触即発の事態であつたそうだ。

「結局、勘十郎さんは加減が悪くなつたとかで途中で引き揚げちまつたけどね。だが二人ともすっかり機嫌が悪くなつちまうし。千穂樂が台無しだ」
洒落た銀の煙管^{きせる}を手にした仙之助は、憂鬱^{ゆうう}そうに刻み煙草を雁首^{たばこ}の火皿^{がんび}に詰める。芸に甘く芳^{かわ}しい香りが漂い出した。最高級の「国分葉^{こくぶんよう}」という煙草で、味も香りも絶品なのだそうな。だが脇息^{きよそく}に頬杖^{こめく}をついた仙之助は、吸い口を唇の端に挟んで恨めしげ

に宙を睨む。

「私らだけじやないよ。周りのお客もひそひそ話してたぜ。二代目はどうしたんだ、最近めつきり腕が落ちたんじやないか、いや弟の方が元から上手かつた、つてね。朝霧のせいなのか、元々才がなかつたのか、どちらだろうねえ」

「ひどい……」

そんな悪評が耳に入つたら、勘十郎はもちろん、お春がどれほど心を痛めることだろうか。いや、すでに耳に届いているのではなかろうか。お春が涙ぐむ姿が目に浮かび、あたたかな部屋にいるというのに寒々とした心地になる。

「口直しに仲町で一杯飲んでたら團十郎さんと行き合つてさ。團十郎さんも、近頃の勘十郎さんの演奏はいけないつて渋い顔してたなあ。顔見世番付には今のところ名があるらしいけどね。下手したら役を降ろされるかもしねないつて言つてたよ。しかし、このままだと、また目も当てられないことになるだろうな。染と梅も一緒に見に行くつもりだつてのにどうしてくれる」

忌々しげに仙之助が吸い口を嘔む。

「だ、旦那様。どうにかならないんじやうか？ 勘十郎さん、朝霧に祟られているんですよ。呪いを解くとか祓うとか、何かできなんですか」

「お前、祟りも呪いも信じてないんじやなかつたか」

お凜は思わず言葉に詰まる。

——だけどこれじゃあ、お春お嬢さんも兄上様たちもあまりにもお気の毒じやない。

顔見世の半月ほど前には「顔見世番付」とか「新役者付」と呼ばれる一覧が刷られ、人々がそれを求めて殺到する。この紙には役者はもちろん離子方の名も連記される。名前が記されていない、あるいは名はあるのに興行から外された、などということになれば、勘十郎の名は地に落ちるだろう。勘十郎のみならず家族や門人にとって、考えうる最悪の事態だ。

おもむろに立ち上がつた仙之助は、壁に掛けてある朝霧を両手に取つて、あたかも恋人を見つめるようにして問いかける。

「朝霧。お前さんもつれないねえ。私みたいな男前を差し置いて、勘十郎さんにご執心とは妬けるじやないか。私を虜にしておくれよ。それとも、勘十郎さんを取り殺すまで満足しないのかね？」

「旦那様、三味線よりも勘十郎さんのことですよ」

三味線に向かって嫉妬まじりの恨み言を紡ぐ主の横で訴えるも、仙之助はふんとばかりに鼻を鳴らす。

「いくら朝霧に魅入られちまつたといつたつて、死んだ鈴吉さんから朝霧を盗むようなお人だぜ。はつきり言つて自業自得さ。助けてやる甲斐なんてあるのかねえ」「そんな言い方、ひどいじやありませんか！お春お嬢さんが悲しまれます。この仙之助にお任せいただけたら、悪いことなぞ起きやしません、なんておつしやつたくせに。お嬢さんにはつかりされてもいいんですね？どこが天眼通の目なの、魚の目か木の節穴の方がまだましよ！なんて言われてもいいんですね？」

うつ、と美女に弱い主が怯む。

「それから小座敷に置いたあの人面樹。そのうち草が生えるようなことになつてもいいんですね……？いつの間にか庭に転がつて、雨に打たれているかもしれませんよ？」

「な、何？人面樹まで人質に取るとは卑怯な」

怪異にも弱い主が、ぐぬぬ、と朝霧を抱く手に力を込める。

「——まあ、染がまた悶着を起こして、中村座に出入り禁止になつたら困るしなあ。しかしどうして私がそんな男を……だがお春さんのためか……？」

「そうですとも。男を上げる好機ですよ、旦那様！」

「これ以上いい男にならなくともいいんだけどなあ」

なあ、朝霧や、などとまるで緊張感に欠ける様子の主に、地団太を踏むお凜だつた。

雨音にまじつて慌ただしい足音を廊下に聞いたのは、それから一刻（約二時間）ほど経つた頃のことだった。

「旦那様。お客様がおいでなんですが……？」

「お客様？こんな時分に、一体誰だい」

障子が開き、膝をついたお江津が顔をのぞかせる。その背後には、灰色に煙る暗い庭が陰鬱な雨を透かしてぼんやり見えた。お江津はふつくらした頬を強張らせ、目尻の少し下がつた目を泳がせていた。

「へえ、それが……あ、あの」

背後を振り返り、お待ちくださいまし、とうろたえる。秀眉を寄せた仙之助が、隣室の唐紙を開けて朝霧を押しやり隠す間に、どたどたと荒々しい足音が近づいた。

「天眼通の旦那とかいうのは、あんたかい」

儉しい格子縞の長着に懷手にした男が、縁側に現れるなり敷から棒に言つた。まだ二十そこそこというところか。傘も差さずにやつてきたのか濡れ鼠で、えらく荒んだ風体だ。苦み走った細面に、上背のある体つきをしているが、雨に濡れそぼつた髪はほつれ、

顎には無精髭、顔色も冴えず、切れ長の目にはお凜が怯むような剣呑な光があつた。

「左様ですが、兄さんはどなたで？」

仙之助はのんびりと長火鉢に白い手をかざして応じる。

「名乗るほどのもんじやねえさ」

「いや、名乗つてくださいよ」

男はぐいと唇の端を歪めて笑い、すかずか部屋に踏み込んできた。

「実はあんたに、折り入つて相談事があるんだがね」

折り入つて相談するにしてはずいぶんな態度で仙之助を見下ろす。

「はあ、なんでしよう」

「あんたのところに、近頃若い娘が三味線を一挺持ち込まなかつたかい？ あれを譲つてくんねえかな」

お江津と一緒に身を縮めていたお凜は、どきりとして耳をそばだてた。朝霧のことだろうか。

「若い娘さんに、三味線ねえ。はて、どうだつたかなあ。私の常磐津のお師匠さんのことかな。そりやもう小股の切れ上がつた別嬪でしてね。歌声ときたら絶品で……」「そんなんじやねえ。お春つて娘が来ただろう。その娘が預けた朝霧つて名の三味線だ

よ。金なら少しはある。真っ当な金だぜ」

のらりくらりとした仙之助を遮つて、男は懐から掴み出したものをぽんと放る。仙之助の膝の前で、ペしやり、と寂しい音を立てたのは、年季の入つた藍の巾着袋だ。仙之助が品のいい顔をしかめた。

「ほんとに少しですねえ。お生憎様、この仙之助、金子なんぞで動かされ……ないこともないけど、この程度じゃお話になりませんよ。箱に入れてきてもらえませんか、箱に。山吹色の菓子が好物なんですよ、私」

悪徳役人みたいなことをのたもうて、白い指で摘んだ巾着袋をこれ見よがしに顔の前で振つてみせるものだから、男は激怒した。そりやそうだ。

「この野郎。人が下手に出来やあつけあがりやがつて……」

吼える男の顔に血が上る。男がいかにも喧嘩馴れした様子で拳を振り上げ、きやあつ、とお凜とお江津が悲鳴を上げた時――

「人にものを頼むにしちゃあ、あんまりな態度じゃありませんか。ねえ、糸之丞さん」

耳に通る声が喧嘩を払つた。しん、と茶の間が静まつ返る。

表のひそやかな糸雨の音を聞きながら、お凜は畠然とした。

「糸之丞さんつて、お春お嬢さんの、兄上様の……」

男は唇を引き結び、仙之助を睨みつけていた。一言も発しない様子がいかにも不気味だ。仙之助は銀無垢の煙管を唇の端に咥え、おつり微笑んだ。

「昔、中村座の舞台でお見かけしましたよ。いやあ、素晴らしい糸の音で惚れ惚れしました。それがまあ、三味線をやめてしまわれたんですって？ 私、本当に残念で残念で」

國分葉の香り高い煙をふうっと吐いて、ゆるゆると頭を振つてみせる。

「……そんな昔の話は忘れた」

ようやく男がほそりと言つた。

「そうですか。にしては今更三味線が欲しいだなんて、どういう風の吹き回しなんでしようね。押し込み強盗に較替えでもなすつたんですか？」

「あんたの知つたこつちやねえ」

「そいつはご挨拶。じゃあ、私もあなたの頼みを聞く筋合いじやないですよねえ」はらはらするお凜をよそに、仙之助は白い顔に清々しい笑みを浮かべる。鈍いのか能天気なのか図太いのかわからぬ主だ。たぶん全部なのであるう。

糸之丞は焦れたように頬をぴくぴくさせる。

「ぐだぐだうるせえな。御託はいいから三味線をくれと言つてるんだ」

「嫌ですよ。大体、あれは選ばれた名手にしか鳴らせないっていうじゃありませんか。あなたに弾けるんですか？」

「弾いてみなきやわからねえ。だから寄越せ」

糸之丞の双眸が鈍く光る。

「二代目勘十郎よりも腕がいいって証が欲しいわけですか？ まあ、今夜もひどいもんでしたからね。やっぱりあなたを二代目に、つて話してのお客も多かつたですよ。團十郎さんもそんなことをおつしやつてたし」

喜ぶかと思ひきや、糸之丞は薄い唇をぎりりと噛んで黙り込む。よほど兄への恨みが深いのだろうか、とお凜は内心暗澹とした心地になつた。

仙之助は目ばかりぎらぎらさせて動かぬ糸之丞に辟易した様子で、やがて根負けしたようすに嘆息した。

「しようがないなあ……そうだ、じやあこうしましよう。ここでちいと演奏してみちゃえてもいい」

「なんだと？ てめえ、一体何様のつもりで……」糸之丞は一瞬呆気に取られ、それから茹で蛸みたいに顔を赤く染める。

ちよつと待つてくださいよ、と部屋を出た仙之助が、うきうきとした足取りで三味線を一挺抱えて戻ってくる。

「はいどうぞ。私の愛用の三味線です。『菊岡』で作った最高級品なんですよ。撥は象牙? それとも鼈甲ですか。ささ、ご遠慮なさらず」

「勝手に話を進めるな。やるなんて一言も……」

仙之助は、まあまあまあ、とにこにこしながら男の手に三味線を押し付ける。

「私は音曲を愛する遊び人ですからね。才のあるお人に無下な眞似はいたしません。ええと……じゃあ『供奴』をお願いしましょうか。今年の曲ですけど、弾けます?」

「な、何?」

ぽかんとする男に構わず茶の間の真ん中に立ち、開いた扇子を左手に持つて、くるくる回つて見得を切るなり――

「してこーいーなア」

やたらといい声で掛け声を発する。

「……そら、三味線!」

あんぐり口を開いている糸之丞を急かす。糸之丞は、あ、え、と何がなんだかわからぬ様子でふらふら座り、無意識のように糸巻を触つて調弦をはじめる。そして仙之助が

目頭で合図するや、引きずられるように撥を翻した。

やつちや仕て來い今夜の御供 ちつと後れて出かけたが
足の早いに 我が折れ田圃は近道 見はぐるまいぞよ 合点だ……

仙之助が歌いながらしなやかに両手を踊らせ、きびきびと足拍子を刻む。切れよく艶やかのある三味線が軽快に鳴り響き、茶の間が芝居小屋に変わったかと錯覚するほど明るく華やいで感じられる。

近頃人気の歌舞伎舞踊、供奴である。

吉原通いの主人の供をしてきた奴――奉公人が、主人とはぐれてさあ大変、と鮆背で滑稽な踊りを披露する。腰巻丹前に鎌ひげという跳ね上がった髭、深い月代に膨らんだ鬚の奴頭、手には箱提灯という出で立ちで、「仕て來いな」という掛け声からはじまる踊りは、この春先に二代目中村芝翫が中村座で初演したところ大当たり。今やお座敷芸として大流行している。仙之助はもちろん飛びついて、辰巳芸者の染吉と梅奴に披露するのだ、と稽古に励んで今や玄人はだしの腕前である。

……なんてことはともかく、一体何が起きているのであろうか。お凜とお江津、それ